

第1章

個別の指導計画とは？



この章では…

個別の指導計画とはどういうものか、作成するにあたっての大きな流れについてみていきます。

● 個別の指導計画とは

個別の指導計画とは、障害のある子どもの状態像に応じ、的確な指導・支援の提供が実現できるよう、学校における教育課程等をふまえ、目標、指導・支援内容、評価の観点等を含んだものです。平成11年3月に告示され、平成14年度より完全実施されている盲学校・聾学校及び養護学校の学習指導要領において、自立活動や重複障害児の教育について作成が義務化されました。自立活動とは、「個々の児童または生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」ことを目標にしています。つまり、子ども一人一人の障害の状態や発達段階などの的確な把握に基づいて、目標や指導・支援内容、評価の観点を明確にすることが求められており、その役割を果たすのが個別の指導計画です。

平成16年に文部科学省から出された、小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の子どもの教育に関するガイドラインでは、これらの子どもたちへも必要に応じて個別の指導計画を作成することを求めています。

● 個別の指導計画作成までの流れ

ここでは個別の指導計画を作成するプロセスについて紹介しましょう。個別の指導計画作成というと、計画を立てる部分のみがクローズアップされがちですが、実は、どういう方向性の計画を立てるべきかを見定める実態把握(アセスメント)や、計画の効果や課題を検討する評価も大切なプロセスの内の1つであり、とても重要な役割を果たします。

まずはじめに、子どもの現在の状態(例えば、つまづいている課題や習得しているスキル)、子どもや保護者のニーズなど、あらゆる角度から情報を集め、**実態把握(アセスメント)**を行います。

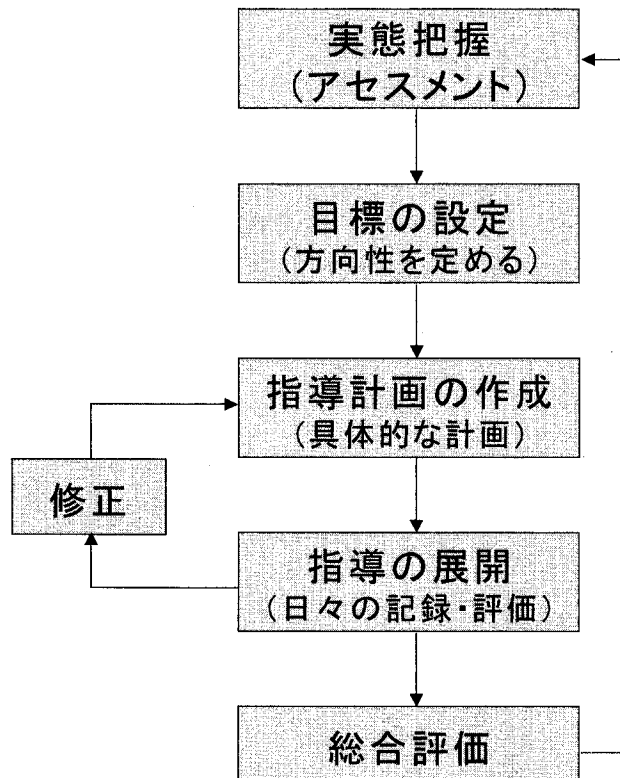
次に、これら実態把握(アセスメント)の結果から、どういふことをめざしたいか、目標にしたいかについての方向性を定めます。

続いて、その目標を達成するための具体的な計画を練っていきます。子どもが目標を達成できるように、こちら側はどのような手だてを講じたらいかにについて念入りに検討していきます。さらに、どういふ様子がみられた場合に目標達成とみなすか、評価の基準を明確にしておきます。

そして、いよいよ実際に子どもを前にした指導に入ります。立てた計画が適切であったか日々の実践と照合し評価します。目標は妥当であるか(高すぎないか、低すぎないか)、取り上げる課題の内容は適切か、課題の順序は適切か、手だての量や質は適切か(手だての量は少なすぎないか、多すぎないか、支援の内容は適切か)など、あらゆる面から評価を行います。そして、必要に応じて計画の修正を行います。このような修正を行いながら、効果的な指導計画が完成されていきます。

最終的な段階では、指導計画に基づいた指導を学期や年ごとに評価していきます。子どもの能力に変化がみられたかどうか、目標としたスキルの獲得は実現されたか、どこまで達成したか、残された課題は何かなどの評価を行います。また、指導した側の評価(効果のあった点、課題点)もあわせて行います。さらに、次にどういふ目標や計画につなげていきたいかなどの見通しを含めた評価も添えます。これらの評価が、次の学期や学年の実態把握(アセスメント)の際の資料へとつながっていきます。

以上のステップは、ひとつひとつのステップがばらばらに行われるのではなく、一連のサイクル(「実態把握(アセスメント)」→「計画」→「実際の指導」→「評価」→「実態把握(アセスメント)」→「計画」…)として機能することが重要です(図1)。



個別の指導計画の流れ

● 個別の指導計画を立てることのメリットとは？

個別の指導計画を立てることで、どういうメリットが生じるでしょうか？

1) どういう点をさらにアセスメントすべきかが明確になる

実態把握(アセスメント)を行うことで、子どもの状態像をより詳細につかむことができるのはもちろんのこと、さらにどういう情報を集めることが必要ということが自ずと明確になってきます。

2) 指導の方向性が明確になる

前もって指導計画を立てておくため、指導の方向性が明らかになると同時に、体系的な指導・支援が可能になります。

3) 評価の視点が明確になる

2つめのメリットとも関連しますが、指導計画を立てる段階で、具体的な目標を設定することにより、どこまでクリアできたなら○、できてなかったら×というように、子どもの達成度、関わる側の指導・支援に対する評価の視点が明確になります。

4) 指導の意図することが他の人へ伝えやすくなる

個別の指導計画という目に見える形のものを作成することにより、他の人へ自分がどういうことを意図して指導・支援を組んでいるかが伝えやすくなります。

5) 子ども自身が自分の学習の方向性を理解しやすくなる

主役である子ども自身が、自分が何を目ざして学習しているのかを理解し、自分の学習に対してモニタリングをすることは重要です。子どもも含め、読む人にとってわかりやすい個別の指導計画を心がけることにより、そのことが可能になります。

6) クラス全体への相乗効果をもたらす

対象とする子どもに対して個別の指導計画をもとにわかりやすい授業を努めたところ、結果的にクラス全体にとってもわかりやすい授業になったとの報告もあります。

7) 作成者のスキルアップにつながる

教師の中に子どもをみていく際の視点が構造化されていきます。子どものつまずきの見立て、つまずきの要因にあわせた指導が論理的になされるようになるほか、「指導計画—指導の展開—評価」というサイクルが、思考の中でも循環されるようになります。

さらに、個別の指導計画を作成することにより、作成者自身が自分の指導を振り返る機会が得られます。このような作成者のモニタリングも指導者としてのスキルアップにつながります。